



なごや「聖歌」だより 2月号'09

晩禱に出てみませんか？

季節は大齋準備、大齋、受難週、復活祭と進んでゆきます。正教会の礼拝は旅のガイドブックのようなもので、それに従ってゆけば、いろいろな体験をしながら迷うことなく目的地につけるように構成されています。中でも見所が多いのは晩禱や大齋中の平日祈祷です。

2月は準備期間が始まります。8日は税吏とファリセイの主日、15日は蕩子の主日、22日は審判の主日、3月1日の赦罪の主日を経て、いよいよ3月2日から大齋です。

この準備期間中、見逃せないのが土曜日に行われる主日前晩禱です。たとえば「税吏とファリセイの主日」には旅の出発点や必要な持ち物が教えられます。

「税吏とファリセイ」という名称は聖体礼儀で読まれるルカ伝18:10-14からとられています。神の律法を自力で守れたと胸を張るファリサイ人と、胸を叩いて自分の罪深さを嘆く卑しい徴税人が比較され、神に嘉せられるのは税吏の謙遜であることが強調されます。まず必要なのは「謙遜」です。

コンダクでは

我等ファリセイの高慢のことばを逃れ、

税吏の謙遜のことばの高きにならいて、痛悔をもって呼ばん、世界の救主よ、爾の諸僕を潔(きよ)め給へ。

と歌われます。

また、早課、福音の読みあとの特別の歌が歌われます。この歌は大齋中、ずっと歌われます。

生命を賜ふ主よ、我に痛悔の門を啓(ひら)けよ、
けだし吾がたましい、全く汚れし体の堂を衣(き)たる者は

爾の聖堂に向いて朝の祈祷を奉る。

願くは爾仁慈なるによりて、

爾の恩寵にて我を潔め給へ。(後略)

その「謙遜」は自分の努力で獲得できる謙遜ではありません。「痛悔」によって浄められなければ得られません。痛悔とは回心、神の方へ方向転換することです。その痛悔すら究極的には自力ではなく神の恩寵に頼らねばできません。

実は大齋のトラベルガイドはハリストスご自身です。祈りの中で、ハリストスに出会い、導かれます。

聖歌練習

♪名古屋：毎主日の聖体礼儀後のミニレッスン。「赦罪の晩課」大齋中の「ワシリー」の聖体礼儀などを練習します。

○8日代式後に基礎練習。

代式祈祷は「お休み」ではありません。信徒が「教会を守る」日です。

今年の復活祭は4月19日です。

♪半田：2月11日(水) 11:45分頃から。
大齋と晩禱の練習をします。

2月の指揮当番

1日 ビーメン松島
15日 エレナ広石

22日 マリア松島

— イコンと聖歌 — 蕩子の主日

コンダク 3調

我無知にして父たる爾の光榮に遠ざかり、
爾が我に託せし富を悪の中に費せり。
故に蕩子の声を爾に捧ぐ、
洪恩なる父よ、我爾の前に罪を獲たり、
痛悔する我を納(い)れて、爾が傭人の一のごとくなし給え。

愚かな私はあなたの光榮から遠ざかり、
あなたが私に託してくださった財産を悪行に費やしました。
だから、放蕩息子のことばであなたに叫びます。
豊かな恩寵の父よ、私はあなたの前に罪を犯しました。
痛悔する私を受け入れて、あなたの雇い人の一人にしてください。





奉神礼の伝統シリーズ4

奉神礼と聖書

聖詠に親しむ

蕩子の主日 早課

136聖詠、1節

「我等かつてバビロンの河辺に坐し、シオンを想いて泣けり」

最も好きな聖歌に、この「バビロンの河辺にて」をあげる人がたくさんいます。蕩子の主日、審判の主日、赦罪の主日の晩禱(徹夜禱早課)で、ポリエレイ(134、135聖詠)に続いて、年に3回だけ、歌われます。

この歌は今から2500年前ごろ生まれました。ユダ王国は紀元前597年にネブカドネザル帝率いる強国バビロニア王国に滅ぼされ、続く586年エルサレムの神殿は破壊され、王と主だった国民はバビロンに連行され約50年間の捕囚生活をおくります。やがてアケメネス朝ペルシアによってバビロニアが滅ぼされ、ユダヤ人も帰国を許されます。この歌は帰還後まもなく、捕囚時代を思い返して歌われたと言われます。

支配者であるバビロンの人々は捕らわれたユダヤ人たちに、余興に故郷の歌を歌えと命じます。ユダヤ人たちは聖

都エルサレムを想い、異教の地で主の歌が歌えるだろうかと嘆きます。シオンとはエルサレムの丘のことです。

この歌は大齋準備の二つめの主日「蕩子の主日」から歌われます。テーマはルカ伝15章11節、親の財産をもらって外国に行き、遊び暮らし、餓死寸前まで落ちぶれて、父のところへ戻ってゆく放蕩息子です。

バビロニアに滅ぼされる以前、神に背く生活をおくるユダヤ人たちに、預言者たちは何度も警告を發しました。しかし人々は聞き入れず、神の目に悪とされることを繰り返し、どうとう虜にされました。放蕩息子は異境の地で豚のえさまで食べようか思うところまで落ちぶれて初めて、心底「帰りたい」と思いました。

私たちもこの世の生活にどっぷりつかって神を忘れ、いつのまにかこの世の常識の中で暮らしています。洗礼の時いただいたハリストスの新しい生命、聖神のたまもの、永遠の神の国の喜びは、どこへいってしまったのでしょうか。神から遠く離れてしまいました。「帰りたい」「帰ろう・・・」父なる神のもとへ。大齋、故郷すなわち神の国への帰還の旅が始まります。

ニコライ大主教はこの歌を聴いて望郷の思いに涙を流したと伝えられます。しかしその日記を繰ると、毎日毎日お金の工面で頭を悩まし、遅々として進まない宣教活動や教役者たちの働きぶりに腹を立て、日記に思いの丈を書き連ね、ため息をついています。聖人の涙は深い痛悔の涙だったのかもしれませんが。

何度でも帰りましょう。神は帰ってくる子供を見つけたら、両手を広げて走り寄り、抱き取ってくれます。

参考資料:『聖詠経』、新共同訳聖書『詩編』、*Christ in the Palms*, Patrick Henry Readon, *Orthodox Study Bible*, 正教基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)、『詩編』フランススコ会訳、『正教会の音楽』(J.V. Gardner) A. Schmemmann, *Great Lent*, SVS

正教会読み 固有名詞

正教会の聖書や祈禱書では固有名詞の読み方がスラブ語の読み方に準拠しているために戸惑うことがあります。市販の口語聖書や、世界史に出てくる人名と異なり、意外な人と同一人物であることがあります。

このバビロン捕囚を行ったネブカドネザル帝は世界史の教科書にも出てくる有名人ですが、正教会読みでは「**ナワウホドノソル**」です。聖大土曜日晚課に読まれるダニエル書に出てきますが、とても同じ名前とは思えませんでした。

今の書き方では、「ワ」は「バ」、「ワイ」は「ビ」と発音すると発音に近いでしょう。「ワフィロン」はバビロン、「ワイフレエム」は「ビフレエム」(ベツレヘム)です。

またギリシア語の「θ」(英語のthの音)はスラブ語やロシア語ではFの音になってしまうので、テの音がフェ、ティがフィになっている場合があります。

ほかにもたとえば、

人名では **マトフェイ**・・・マタイ
イオアン・・・ヨハネ
モイセイ・・・モーゼ
イサイヤ・・・イザヤ
フェオドラ・・・テオドラ
フォマ・・・トマス
地名では **アフィニ**・・・アテネ
アフォン・・・アトス
エギプト・・・エジプト
エフィオピア・エチオピア
エウレイ・・・ヘブライ
グレチャ・・・ギリシア
エルリン人・・・ギリシア人

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料